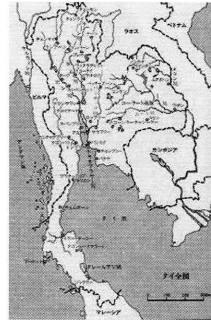


タイにおける日本研究及び古代日本文学受容の実態

Chavalin SVETANANT

(チュラーロンコーン大学)



インドシナ半島の西部とマレー半島の北部に位置するタイ王国は、現在51.4万 km²という世界第49位の総面積と、世界第19位の約650万人の人口を有している。タイという国家が初めて形成されたのは、タイ民族によって13世紀スコタイ王朝という時代で、その王朝の誕生は現在の首都のバンコクから北方約600km離れているスコタイ県であった。

タイと日本との初の直接交流は、約600年前タイのスコタイ時代と日本の第90代天皇である龜山天皇の時代に当たると言われているが、日本との文化交流は、本来現在のタイの国土の中心をなすチャオプラヤー川流域の平原地域に8世紀頃からはじまったと考えられる。

奈良西ノ京に今なお7～8世紀のわが国の白鳳・天平の文化の香りを伝える名刹薬師寺の本尊である薬師三尊像の台座に描かれた紋様は、西域地方の影響も伺える世界的広がりと思わせる図柄が著名だが、その人物像は、タイから出土する9世紀に栄えたモン族の美術品に似ているという。吉川教授は、薬師如来を鑄造する際、南方の妙薬を持参した人々に感謝の意をこめて、古代日本人が刻み込んだのであろう。日本に輸入される生薬は、一般に漢方と呼んでいるが、その多くは中国南部からインドシナ半島が原産地であると述べておられる¹。

1 松井嘉和(1999)『タイにおける日本語教育—その基盤と生成と発展—』。松井はさらに、綾部恒雄、永積昭編(1982)『もっと知りたいタイ—もっと知りたい東南アジア1』を参照している。

タイにおける日本研究

日本への興味は、歴史研究の史料や残された遺物によると、昔からずっと続いているようである。たとえば、明治時代に当たるラーマ5世時代の宮廷では、日本人のシルク製造の職人や法律の専門家を招待して、日本の技術・知識を教わっていたという歴史の記録が残されている (Chatthip, 1983) ²。

しかし、「日本研究」と言えるような学問は、その100年後、つまり戦後の1960年代から始まった。Pasuk Phongpaichit (2007) は60年代からタイにおける日本研究を次の四つの時代に分類した。

- ①60年代：自国を理解する
- ②70年代：経済的大国となった日本を学ぶ
- ③80年代：タイに大きな影響を及ぼす日本を知る
- ④90年代から現在まで：グローバル化時代の日本として

日本研究という分野は、60年代のタイにおいてまだ珍しかったというものの、戦後の日本は経済発展が以前よりずっと急激に向上したことによって、アジア全般について興味を持つタイ研究者たちは、日本という国そのものを理解するためではなく、戦後に類似したような問題を抱えた自国のタイを理解するために、戦後から早くも復活した日本を模型として比較研究を進めた。

70年代初期に入ると、世界中にオイルショックと経済混乱が起こり、石油危機やインフレにうまく対処した日本は、群を抜いて巨大な経済力を有している大国として注目された。それと同時に、日本政府側は、「国際交流基金 (The Japan Foundation)」という組織を通して、日本研究助成金を援助するプログラムを世界中に広げて、タイの研究者もその勢いで特にアジア地域における日本の巨大な影響を研究せざるを得なかった。

70年代の経済危機から回復期を乗り越えたタイは、80年代に入ってまもなく盛んな時期を迎えた。その回復をもたらした一番大きな原因は、日系企業からの投資である。タイの経済及び社会に大いに影響を与える日系企業、特に SMEs という日系の中小企業のおかげで、タイの研究者たちはさらに日本の経済や政治に目を向け、日本政府がタイにおいてどんな経済対策を持つのか、急激に増えてきた日系企業はどのような動機でタイ市場に投資したのか、または日本式産業や会社組織・日本人の働き方とはどういうものなのかなど、できるだけタイの経済に関わるすべての要素を徹底的に研究する傾向が見られた。

このように 80年代には経済やビジネスに向ける日本研究が主流として続々と成長してきたのであるが、それ以外の分野、たとえば文化や歴史などに対する興味も

² Chatthip Nartsupha, "Japanese Studies", in Sakon Phongphaisan (ed.), *In the Academic Circle*, Bangkok, Sangsan, 1983.

少しずつ高まった。ただし、当時日本語が読める学者がまだ少なかったため、その研究の元となる参考文献のほとんどは、世界中で既によく知られていた英語で書いたものであった。その代表として、Ezra F. Vogel 著の『Japan as Number One』、Ruth Benedict 著の『The Chrysanthemum and the Sword (菊と刀)』などが挙げられる。

日本に興味を持つタイの研究者、特に日本政府から奨学金をもらって日本の大学で教育を受けたタイの研究者は、90年代から様々な分野で活躍している。経済や政治についての研究は、80年代とほぼ変わらず日本とタイとの関係、あるいは日本と東南アジアとの関係ということが中心となっている一方、日本という一つの国としての理解を深めるために、日本の歴史・文化そのものにも興味を持つ学者も増えている。Prince Shotoku and His Role on Buddhism by Kanokwan Suthiporn (2002); Emperor, Nobles, Warriors and Merchants in Pre-Modern Japanese Society by Pipada Youngcharoen (2003)などがその代表である。

また、21世紀のグローバル化時代に生きている若い世代の研究者たちは、日本のポップカルチャーにほとんどの興味を占められるため、近い将来には日本のマンガ・アニメ・音楽・流行などという新たな方向性の研究もどんどん増え続けると予想される。

日本語教育と古代日本文学受容の実態

タイにおける古代日本文学受容の実態を検討する前に、遑つてまずタイにおける日本語教育史に少し触れておきたい。

国際交流基金が提供した日本語教育実施状況情報によると、タイにおける戦後の本格的な日本語教育は、1960年代中頃、タマサート大学およびチュラーロンコーン大学に日本語講座が設けられたことによって始まり、バンコクの総合大学を中心に進んできた。

その後、日本語教育は徐々に他の総合大学へと広まり、1981年になると後期中等学校（高校）の第二外国語の一つとして正式に日本語が加えられたことによって、中等教育段階でも日本語教育が始まったのである。

日本語に対する関心が次第に高まり、後期中等学校の学習者が増加していくうちに、各地域にある地域総合大学（旧教育高等専門学校）にも日本語講座開設が増えしてきた。それぞれの地域総合大学に勤めている教師や日本語・日本文学に興味を持っている人からの需要に応じて、1997年にタマサート大学に大学院日本研究科が開設され、その2年後にチュラーロンコーン大学に「日本文学・日本語」専攻の大学院が開設された。

しかし、古代日本文学研究はタイにおいてあまり扱われていないように見受けら

れる。そのわずか少ない数のうち、ランシマー・ブンシンスック氏³の『小野小町集』全評釈と小町歌の研究」、アッタヤ・チョーティカプラカーイ氏⁴の『源氏物語』藤壺の宮の出家』『源氏物語』における空蟬の出家』『源氏物語』の出家の表現—男女の違いをめぐる—」、それに、”The pillow-book of Sei Shonagon”という「枕草子」から英語に訳した作品を考察したソー・シワラック氏の「枕草子に関するノート」というような研究が挙げられる。

それに対して、近世日本文学や近代日本文学の方が相対的にタイの研究者に興味を示されるように思われる。例を挙げてみれば、ピヤチット・ターデーン氏の「川端康成論」、サオワラック・スリヤウオンパイサーン氏の「能に見る親子像」「謡曲にみる娘の姿」、モンター・ピムトーン氏の「芥川龍之介の小説における基本的構造」などが挙げられる。それに加えて、チュラーロンコーン大学「日本文学・日本語」専攻の大学院では、近世文学近代文学を扱う修士論文が古代文学より遥かに多いという傾向が見られる。

タイでは、現在テキスト・新聞・雑誌・漫画・テレビ・音楽などを通して、日本の経済・政治・社会・技術・流行・生活空間など様々な分野へ関心が大いに寄せられている。タマサート大学やチュラーロンコーン大学といった国立大学に大学院を設置したことによって、さらに日本についての研究が盛んになったように見える。ところが、経済や政治などについての日本研究が盛んになりながらも、上述したように日本語や日本文学についての研究は意外にもごく少ない。それは経済や技術などという分野から離れた日本文学を研究する人が少ないからであろう。日本やアメリカなどへ留学した経験のあるタイ人の日文学研究者たちは、帰国後、教育機関で日本語の学習者の需要を満たすために日本語の授業にほとんどの時間を奪われ、研究そのものに励む時間はほんのわずかしかないという意見もある⁵。また、海外から帰国した日文学研究者たちは、日文学を研究し続けるより翻訳の仕事に目を向けてしまうという実状もある。その上、タイの人々にはあまりにも日文学に関する知識が不足しているため、日文学についての論文が公開されても理解できる人がなかなかいないという問題に直面しているとナイヤナー・チットランサン⁶は述べている。従って、現在タイにおいて日文学を研究するというよりも、先に日文学をタイ語に翻訳することでタイ人に日文学に触れる機会を増やすことの方が優先されるのではないかと同氏はいう。

なお、初めてタイ語に翻訳された日文学は、「不如帰」という徳富蘆花の作品である。今から約 50 年前 1954 年に有名な翻訳家のアマラワディによって翻訳され、

3 京都大学大学院人間・環境学研究科博士号取得。

4 大阪大学大学院文学研究科博士号取得。

5 アッタヤ・チョウティカプラカーイ、マッタナー・チョトウラセンパイロート (2000) 「タイにおける日本文学」『詞林』第 28 号。

6 Naiyana Chitrangson, (1990), *A Content Analysis of Japanese Literature Translated into Thai*, Chulalongkorn University: Bangkok, 1990

ある週刊誌に連載された。ただし、アマラワディ氏は原文からではなく、「NAMIKO」という英語訳の本から翻訳したのである。それ以後、しきりに出版されていたというほどでもないが、タイ語訳の日本文学は英語訳やフランス語訳の日本文学からタイ語に翻訳され、次々と市場に出されたようである。例えば、芥川龍之介の「藪の中」、竹山道雄の「ビルマの豎琴」、川端康成の「山の音」「雪国」、三島由紀夫の「潮騒」「午後の曳航」、小林多喜二の「蟹工船」、谷崎潤一郎の「鍵」などが挙げられる。このように、タイ語に訳された日本文学も、日本文学研究と同様、近代文学作品が中心となり、残念ながら古代文学作品のタイ語翻訳は70年代まで一切見当たらなかった。

1977年になってやっと直接日本語からタイ語に翻訳された作品が登場した。それはチェラーロンコーン大学文学部日本語講座によって、国木田独歩の「春の鳥」、森鷗外の「高瀬舟」、芥川の「蜜柑」、川端の「伊豆の踊り子」などといった12の短編小説から成る「日本近代文学短編選第一集」という作品である。さらに、その2年後の1979年に、タマサート大学日本講座の学生たちによって日本古典文学作品「古事記」がタイ語に翻訳された。ただし、タイ語版の「古事記」は原作から翻訳されたものではなく、短編の「古事記物語」から翻訳されたものであるが、この作品こそがタイ語に訳された唯一の古代日本文学とも言えよう。

参考文献

- アッタヤ・チョウティカブラカーイ、マッターナー・チョトゥラセンパイロート「タイにおける日本文学」『詞林』第28号、2000。
- 石井米雄、吉川利治『日・タイ交流六〇〇年史』講談社、1997。
- カンラヤニー・シタスワン「タイ語訳の日本文学」『境界と日本文学—翻訳とその周辺—』国文学研究資料館、1999。
- 国際交流基金「海外の日本語教育の現状—日本語教育機関調査・2003年—」凡人社。
- 松井嘉和、北村武士、ウォーラウット・チャラソンバット『タイにおける日本語教育—その基盤と生成と発展—』錦正社、1999。
- Naiyana Chitrangson, *A Content Analysis of Japanese Literature Translated into Thai*, Chulalongkorn University: Bangkok, 1990.
- Pasuk Phongpaichit, "The State of Japanese Studies on Social Science in Thailand", International Symposium on Japanese Studies, Institute of Social Science: University of Tokyo, 2007.